

マリ農村の「学校化」

—学年をめぐるやりとりから—

今 中 亮 介*

—イサ、お前の学年はいくつなんだ？
—19年だ。
—へーすごい。あとどのくらい続くの？
—わからないけど、たぶん5年くらいじゃないかな。

わたしは調査中に子どもを相手によく年齢を尋ねる。知らない、と言われることもあるし、知っていても本当より高く言ってくることも多い。結局、本人に聞いただけでは判断できないので、出生届をもっている親に尋ねたりもする。しかし、親も届を無くしていたりして知らないことがある。今度は、誰と誰が同い年で誰が誰より年上でといった、具体的な2者の関係を本人や第3者へ尋ねる。こんな風にいろんなことをしながら「推定年齢」を出していく。でも結局のところ年齢は推定でしかなく、はっきりとはわからないことが多い。

年齢を尋ねるときに学年を尋ねることもある。学年は年齢ほど高めには言っていないし、あやしいと思えば学校に行って教室を覗いてみればいいのでわかりやすい。学年を尋ねたときにしばしばおこるのが、上のような

やりとりだ。学年を反対に尋ね返されて、わたし（イサ）は19年という彼らからすると非現実的な年数を言う。大体はそれを聞いて驚く。わたしはその反応をみて少し得意になると同時にどこかきまりの悪さも感じる。あとどのくらい学校が続くのかと問われることもあり、そんなときは大体、わからないけど、と前置きをしてからあと5年くらいじゃないかなと適当に答える。

マリ南西部に位置する人口約2,000人の調査村には、5種類の「学校」がある。幼稚園、小学校、中学校、コーラン学校、成人学校である。幼稚園は仏語の「幼稚園 (jardin d'enfants)」から「ジャルダン」と呼ばれるが、あとの学校は現地語で公立の小中学校が「トゥバブーカラン」、コーラン学校が「モリカラン」、成人学校が「バリクーカラン」と呼ばれる。現地語で「学校」は「カランウォロ」という。上記の各学校の語尾にある「カラン」は「カランウォロ」の省略形である。「カラン」は動詞で「読む」を意味し、「ウォロ」は名詞で「場所」を意味する。つまり、学校とはなにかを読む場所である。しかし、なにかを読む場所といっても用いられる言語

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

はそれぞれ異なる。小中学校では白人（トゥバブー）の言語である仏語を読み、コーラン学校ではムスリム（モリ）の言語であるアラビア語を読む。そして、成人学校では成人（バリクー）の言語であるバンバラ語を読む。バンバラ語はマリ南部のリングフランカであり、文法的にも語彙的にも現地語のマリンケ語と非常に近い。出稼ぎや高等教育機関への就学先である首都バマコの言語でもあるので成人の言語といってもあながち間違いではないだろう。

幼稚園はある国際 NGO に促されて 2009 年に開園した。5 つの学校のなかで最も新しい。NGO からは生徒用のイス 22 脚と教師用の教科書が配布されただけで、施設や教員の給料などは提供されていない。専用の施設がないので、授業は村に以前からあった若者小屋（*maison des jeunes*）で開かれている。授業は 3 人の成人女性が無償でおこなっている。彼女たちは免許をもつようなプロの教師ではないが、それぞれ、女性組織の長をやっていたり、村に仏語を操れる女性がほとんどいないなかでしゃべれたり、やり手のおばちゃんたちである。NGO から配布された教科書に沿ってアルファベットや数字の読み書き、歌やダンスなどを教えている。幼稚園は小学校入学の準備段階として位置づけられており、およそ 3~5 歳の子ども 44 人が通っている。1 年間で全カリキュラムを終えるようになっており、多くの者が卒園後すぐに小学校へ入学する。したがって、幼稚園と小中学校はひとつの連続として捉えることができる。当然、この連続の先には村外にある



写真 1 イスをもって幼稚園へ向かう子どもたち

リセや専門学校、大学などの中・高等教育機関がある。

コーラン学校は植民地期以前からある。しかし、基本的に 1 つの学校につき 1 人の教師しかおらず、教師がいなくなると学校もなくなるので、現在村に 4 つあるコーラン学校と植民地期以前のそれとは同一ではない。生徒は村外からの者と村内からの者がおり、前者は教師の家に住み込んで勉学に励んでいる。生徒は無償で住まい、食べ、学ばせてもらう代わりに畑仕事などの労働をおこなっている。4 つの学校の村外からの生徒の数は、25 人、19 人、13 人、10 人である。村内の生徒は来たり来なかったりで、正確な数は把握できないが、各学校につき 5~10 人ぐらいだろう。教育内容はコーランの読み書きである。その他の学校におけるような教師から生徒への一斉教授はみられず、生徒たちはそれぞれの進度に応じて学ぶ。また、教師から直接教えられるよりも古参の兄弟子から教えら

れることの方が多い。当該の箇所を覚えられないまで、とにかく大きな声を出して反復して読み上げるので、コーラン学校の近くを通ると子どもたちの威勢のいい声が聞こえてくる。コーラン学校は幼稚園から大学へと続く連続のなかにはない。しかし、稀ではあるが、卒業後に仏語とアラビア語の両方を学ぶマドラーサへ進学する者もいる。

成人学校も幼稚園と同じNGOの援助によって1985年に開校した。専用の教室があり、黒板とイス、机が設置されてある。生徒には教科書2冊、ノート、小黒板、チョーク、ボールペンがNGOから配布される。教員である40代の女性は村からおよそ7km離れた隣町から来ており、NGOから給料を受け取っている。生徒は既婚女性ばかりで32人いる。授業を覗いてみると小さな子を連れてお母さんも多く、教師も含めて雑談をはさみながら和やかな雰囲気だ。開校当初は男性も通っていたそうだが、今は全くいな

い。そのことについて一期生として通っていた男性に尋ねてみると、最近はお金がないからみな仕事をしていて暇がない、という答えが返ってきた。そうした経済的な理由に加えて、男性に比べて女性の公立学校における就学率が低いことも影響しているのかもしれない。最近では女子就学向上のためのさまざまなキャンペーン¹⁾がNGOなどによっておこなわれているが、以前は女性で公立学校へ行く者はわずかであった。成人学校は読み書き、計算の基礎を学ぶところなので、公立学校でそれらの知識を学んだ者にとっては必ずしも行く必要はない。したがって、成人学校は幼稚園から大学へと続く連続の外にありながらそれらの学校で教育を受けられなかった者の補完的な学習の場ともいえる。

村内の小学校は1974年に、同じく中学校は2003年に開校した。1974年というも随分以前から「学校化」が進行していたように思われる。1977年生まれの子の村の男性シャカは、リセを経て、教員養成学校を卒業したの

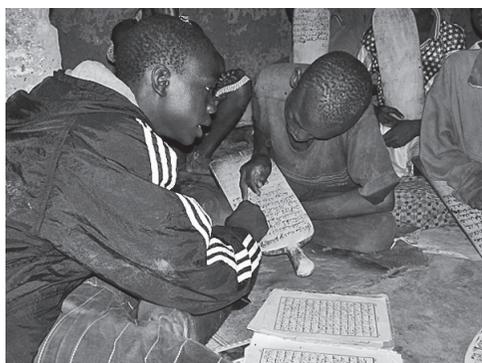


写真2 コーラン学校の様子
兄弟子からの教示。

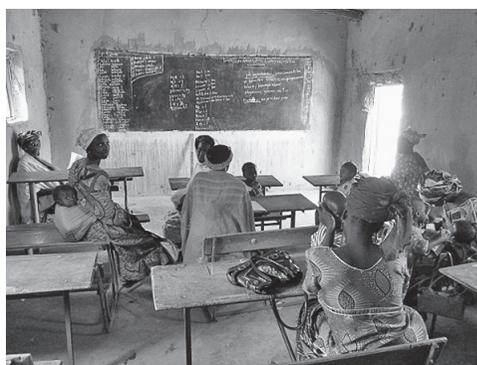


写真3 成人学校の授業風景

1) 女子生徒だけを対象とした通学カバン、ノート、ボールペン、小黒板、チョークなどの配布や補習授業など。

ち、現在小学校の教師をしている。シャカが小学校を卒業した1993年には6年生はわずか7人しかおらず、卒業試験に合格して中学校へ入学したのはシャカを合わせて4人だけだったという。このころは村の多くの者は公立の学校に興味をもっておらず、子どもはコーラン学校へ通うだけだったそうだ。小学校への入学は通常7歳のときだがシャカは10歳で入学した。10歳のときに父からコーラン学校をやめて公立の学校に行きなさいと言われたからだそうだ。今は亡きシャカの父が当時何を考えてそう言ったのかは知る由もないが、現在シャカが立派な教師として活躍しているのをみると先見の明があったのかもしれない。1993年に7人しかいなかった小学6年生の人数は、2007年には130人（うち女性52人）になっている。年によって生徒数はばらつきがあるものの、現在では村のかなりの数の子どもが小中学校へ通っている。このことから1974年に小学校は開校していたものの、「学校化」が本格的に進行したのはせいぜいここ数十年のことであることがわかる。

子どもに学年を尋ね返され、「19年だ」と答えたら驚かれたということを冒頭で述べた。そのときに感じたきまりの悪さとはなんだったのだろうか。わたしたちの社会では学年は他者とのやりとりにおいて確かな土台を与えてくれる。学年を聞いて、とたんに敬語をやめて打ち解けるようなことがある。学部生のころには大学院生と聞いて身構えてしまったこともある。でも、それはこっちに来

たら通じないものだと思っていた。フィールドで子どもたちとなにかをしているとき、たとえば、コーランを学んでいるとき、共同労働をしているとき、サッカーをしているとき、わたしは笑われてばかりだ。どう考えても「1年生」か「2年生」でしかない。それでもたまには褒められることだってある。そんなときはとてもうれしいし、きまりの悪さなんて全然感じない。そういうものだと思っていたからこそ、学年だけを聞かれて、なにもしていないのに褒められたような驚きを見せられたときには素直に喜べなかった。きまりの悪さは、こんなに遠いところにいるのに、なんで学年はわたしたちのものと同じように比べられ、扱われているのだろう、という違和感からきていたのではないかと思う。

幼稚園から大学へと続いていく「白人の学校」の「学校化」は、近年抗しがたい勢いで進行している。しかし、それらの学校とは全く異なる尺度で動いている「ムスリムの学校」の重要性は全く揺らいでいないようにみえるし、公立の学校に行かなかった者がおしゃべりを楽しみながら最低限の知識を学ぶ「成人の学校」も機能している。白人の学校に行くことは決して悪いことだとは思わないが、それらの学校に行かないことが悪いことだとも思わない。マリ農村の「学校化」は「白人の学校」だけの画一的なものではなく、別の学校へ行くことも、とりあえず学校に行かないことも許されるような複数的でゆるやかなものであってほしいと思う。

信じる者は救われる？

小田なら*

厳しい日差しがジリジリと皮膚を焼こうとも、霧雨の雨粒が視界を遮ろうとも、夫婦が乗るバイクは進んでいく。ハノイの市街地から北へ2時間半、大きな高速道路、2車線の国道、未舗装の道路、水田のあぜ道を通ってようやく集落の診療所にたどり着いた。診療所はガラス張りの大きな引き戸の建物で、建てられて間もないようだった。軒先には「長寿のLT翁」「不妊、子どもができてにくい男女へ…」と看板が掲げられている。私は、この夫婦が不妊治療と男子産み分けて評判の良い伝統医学の診療所に通い始めておよそ3ヵ月後、かれらの診察についてきた。

かれらは結婚してから5年が経とうとしているが、子どもはまだいない。夫婦の妻の方は、理系の大学を首席で卒業したエリートで、夫は家の近くで小さな会社の経営に忙しい。妻の実家にはハノイで大学教員を務める父と（ベトナムでは珍しい）専業主婦の母、弟がおり、特に父母は孫の誕生を心待ちにしている。かれらは優等生らしく、科学的根拠のない医療は効かないし、やっぱり頼りになるのは西洋の医学や外国から入ってきた薬だ、加持祈祷で治してもらうなんて迷信、もってのほかだ一と言う。しかし、だからといって父母は実家の田舎で伝承されてきた薬草の知識や、先祖のお墓を建てる日和を

占いで決める習慣を完全に捨ててはいない。「ちゃんとしたきれいな病院で、ちゃんとしたお医者さんに診てもらわない」と言うものの、自分の子どもがなかなか妊娠しない一となれば、話は別である。孫がほしいという個人的な感情と、子どもがいなければ一人前ではなく長男が必要だという文化的なプレッシャーのもとで、ここ数十日、家の台所では調合された伝統薬を煮出す香りがずっと漂っている。

話を診療所に戻そう。かれら夫婦は子どもを授かりたい一心でここにやってきた。しかし、いったい効くのだろうか一という疑念ももっていることが会話の端々からうかがうことができる。入口にバイクを止め、引き戸を開いて中に入ると、向かって右手にはベトナムをはじめ中国や韓国の伝統医学の診療所でよくみられる木製の薬棚や薬瓶が並べられ、大きな作業机が置かれている。薬棚の小さな引出しそれぞれには漢字で薬の名前が書かれており、棚に並べられた大きな薬瓶には薬の名が漢字とベトナム語で記されていた。部屋の左側にはゴザを敷いた寝床が置かれ、木製の応接セットが中央正面に並んでいる。まず患者らはここに座り、診療所の主を呼ぶ。奥から小柄で年老いた、しかし血色のよい翁が登場してきた。挨拶を終えると、翁は夫を応

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 診療所は一見、普通の家ようだ



写真2 壁には翁の先祖や自身の写真を飾っている

接セットの傍にある小椅子に座らせ、脈を診る。「どうですか？」との問いに、「うむ…」とつぶやきながら、しばらく静かに夫の左右の手を順にとり、脈診する。

この翁は94歳だが顔に皺はほとんどなく、白い肌は紅色に高揚していて艶がある。背中が少々曲がっているものの、足どりは軽い。翁によれば、かれは12~14世代前にゲアン省から移り住んだ一族の末裔で、この集落には300年前から家があるという。代々、薬についての知識を伝えてきた一族に生まれ

た翁は、12歳の時より実の父親から漢字や伝統薬について学んだという。60代で定年を迎えるまでは学校の教員として働いていたが、現役時代は並行して家伝の知識によって治療もおこなっていた。つい十数年前から診療所を新築し、治療を専門におこなうようになった。現在は、同じように家伝の知識を引き継いだ60歳をすぎた息子が診療所を手伝っている。

「君はもう、薬はいらないよ。(妻の方を向き、) さあ、脈を診よう。」翁は妻の脈をとった後、薬を調合するために薬棚へ向かった。「おじいさん(先生)、私だけ飲まないといけないの？」妻のグチを聞きながら、薬を調合していく。

ここに限らず、どの伝統医学診療所でも薬を調合する手順は同じだ。まず、茶色い正方形のやや厚い紙を薬の包みの個数分、作業台の上に敷く。だいたい、1包で3日分の飲み薬を煮出すことができるので、たとえば15包つくれば45日分の薬となる。次に薬瓶や薬棚の引出しから薬を取り出し、1種類ずつ順に包紙の上に少量ずつ置いていく。この時、薬の分量は目分量で測り、調整していく。これを繰り返す、すべての薬を並べた後、立方体の形に収まるように包紙を織り込んで輪ゴムでとめる。薬を調合する処方箋は、医者によって異なる。処方箋をあらかじめ書いて確認しながら薬を選び取る医者もいるが、この翁は何も見ずにあつという間に16種類の薬を並べていった。息子によれば、この翁の場合は基本の処方に独自の薬を加えるため、より効果が出るらしい。この診療所



写真 3 この作業台の上で薬を調合する

には、土日になると中国国境沿いのランソン省など、遠方からはるばる患者がやってくるという。評判はもっぱら「口コミ」で広がっていく。

できあがった薬は 15 包。かさばる包みをビニル製の買い物袋に入れ、バイクにくくりつけて持ち帰る。何でも単刀直入に聞く妻が「本当にこれで（子どもが）できるの？」と翁と息子に聞くと、「今年中だな」と息子が返す。「長すぎるわ！」と言いながらも、妻は期待を捨てていない。母親も、「あのおじいさんの薬を飲み始めて、知り合いの 45 歳の女性が妊娠したのよ。あと、男の子をお願い、と言えはそうなるように薬をつくってくれるそうよ」と、後に期待を込めて私に語った。

さて、このように家伝で営まれている伝統医療は、近代医療で治療しきれないときに頼る場合が多いようだ。つまり、代替・補完的に、あるいは最後の手段として伝統薬を試してみるのである。翁のところへ通う夫妻も、はじめは近代医療の病院で検査を受けていたが、うまくいかなかったという。もうひとつ、最後の望みとして伝統医療を試す例を挙

げたい。

私の家の近所に住む高齢の女性は、妹が末期のガンに侵され、病院で治療を受けさせていた。病院ではびこっている「わいろ」の習慣を仕方なく受け入れ、熱心に少しでも回復することを願っていた。しかし、とうとう何も手の施しようがなくなり病院にもいられなくなった際、少数民族の薬に詳しい女性の薬が効く—という情報を聞き、その女性は娘とともに一日がかりでハノイの隣の省へ出かけていった。ハノイからタクシーを一日借り上げ、ハノイから西に隣の省へ向かう。少数民族の多く住む地域として観光地化された地域からさらに山の方へ進むと、畑が広がり土間づくりの木造の家が点在するところへ出た。小さい丘の上にある家に、薬草に詳しいタイ族の女性がいう。

家へ入ると、女性とその夫がお茶で迎えてくれた。土間の家の中央は舞台のように一段高い部分があり、そこが寝床となっている。庭へ通じる裏手には、乾燥させた薬草が並べられている。薬草の名前を記したものは何もなく、すべてはこの女性が知っているのであろう。ハノイの女性はあらかじめ妹の症状を携帯電話で伝えていたので、すぐに薬の準備にとりかかっていった。薬を包んでいく手順は、翁の場合と同じであった。

実はこの女性の父方の祖父は中国人、父方の祖母は白タイ族である。薬草に関する知識は祖父母両方から受け継いでいるのだそう。この家もやはり「口コミ」の力が強く、タインホア省やゲアン省といった遠方からも患者やその家族がやってくる。



写真4 取ってきた薬草は庭先で干す



写真5 薬はこのように分けられている

薬の包みを受け取った後、ハノイへ戻った高齢の女性はすぐに妹の住む家へ直行し、薬を渡した。郊外での加持祈祷も頼み、何度か通ったという。しかし、結局妹はしばらくして亡くなった。

1年半を越える私のハノイ滞在も終わりに近づいたころ、友人が「面白い場所に連れて行ってあげる」と、遠出に誘ってくれた。バイクでハノイからひたすら東へ向かう。3時間ほどで、ようやく目的地の村に到着した。その村は、何の変哲もない水田の中に集落が二つ三つ集まったところであった。古い土堀にレンガで補強した壁伝いに、「このおじさんの家はどこだい？」と村の子どもたちに尋ねながら、ある一軒の家にとどり着いた。迎え出てきてくれた初老の男性の家の居間には退役軍人であることを示す賞状のほか、つたない漢字の掛け軸、派手なイルミネーションがついた観音立像、先祖への祭壇が並んでいる。いったいここはどこかと友人の様子をうかがうと、友人は小声で説明し始めた。「このおじさんは、特別な能力があるんだ。人の人生すべてを丁寧に占ってくれる。」

この男性は、中年になってから人相・手相・四柱推命を勉強し始め、観音の啓示によって人の一生を占うことができるようになったという。私の髪の毛の生え際、耳の形、目、などを見た後、こう言った。「君の実家の隣には、小川か堀があるだろう？それから君は、お金は入ってくるけれどもためることができないだろうねえ。どうしてって？耳たぶが、内側を向いていないからだよ。」およそ2,000円で（ベトナムの物価からいえば高額）、人生のゆくえについてノート1冊分を書き記してくれるそうだ。

ベトナムでは1975年以降の社会主義政権下、迷信行為は一切禁じられてきた。しかし近年、なかなか見つからない戦没者の遺骨が霊能力者の力によって見つけられるなど、かつて禁じられていたものも表立って利用されている（もちろん、これに便乗したいかさま霊能力者も続出した）。また、伝統医療をおこなう医者は医療行為を認める免許をもつことが定められているが、そうでなくとも経験に裏打ちされた力や口コミを信じ（ようとし）、最後の望みを求めて遠方から人々が集

まる。どのような大義名分によって抑えられていようと、苦しい現状を打破する希望をもちつづける術をもつ一数々の場面で、私は人

間として当然で大切なことを改めて実感したのであった。

ジュガード・ソリューション

—場当たりのような、ひとつの知恵のような、思い込みを取っ払う言葉—

川 中 薫*

2009年からデリーのアパレル生産企業を中心に、アパレルやテキスタイル関連の生産現場を訪れる機会をえている。おもに北インドの地域で、見に来てもいいよといってもらえるたびに、ほいほいと出かけていく私である。

8月、毎年のように訪れてお馴染みになっている企業に、半年ぶりに顔を出した。本生産がはじまる冬にむけて、サンプル生産をしているところである。

「こんにちは、元気だった？」といって顔を出すと、「おお、よく来た。まあまあ、座れ、座れ。どうだった、元気だったか、家族は元気か。チャイを飲むか」と、どのフロアでもまずはマネジャーやマスターが、そして馴染みのメンバーが次々に話しかけてくる。ここは小規模の会社で、たいていの情報はすぐに誰かが伝達して、次の場所では話が早い。私のヒンディー語もすこしは上達したのかなと幸せな錯覚を覚える初日である。

各フロアをひととおりまわって2、3日もすれば、すっかりお客さんではない私には、11時から15分間と16時から15分間のチャイ休憩時に、マネジャーやマスター用の余りがあれば飲むかと聞いてくれる。このお茶休憩と13時から30分間の昼休憩を合わせた1時間、フロアの電気と動力を消すので、普段鳴り響いているミシンの音も静まり、布地をバタバタして巻き上がる埃に悩まされることもない。ごろんと屋上や部屋の隅で横になったり、ひとり黙々とお祈りを捧げる人がいるかと思えば、ベルの音と同時に階段をかけ降りて外に行き、タバコを吸いながら話をしたり、お茶を飲んだりする人もいる。このときは、隣近所の工場やオフィスも休憩時間で、急に道端に人が増え、通り沿いの小さな露店がにぎわう。

隣の建物の地下にある企業と2軒隣の工場は同じようなアパレル会社で、向かいは布地の工場、裏の建物はアパレル輸出促進関連

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

の事務所、同じブロック内には染色工場、刺繍企業がいくつかある。休憩のとき外に出ると、このあたりで働く人たちが取引先以外の他の企業のこともよく知っているのかわかるような気がする。時間も限られているから、遠くや違う通りへは行かないが、テーラーはテーラー同士、現場のマスターはそれぞれ同じ仕事をしている者同士なんとなく集まって、話をしたまま仕事に戻って行くのである。

このようなカジュアルな情報交換の場や、以前働いた場所での関係から新たな仕事につながることもよくあり、私もそこに混じって、いろいろな人がもつノウハウや知り合いを紹介してもらいながら染色や刺繍の産地に出かけている。

こうしてものを作る現場でフィールドワークをしている最中によく思い浮かぶ言葉がある。ヒンディー語でカジュアルに、そして、たいていおもしろおかしく、よい意味でつかう *jugaad* という言葉である。 *Jugaad solution* などと組み合わせると、フットワークの軽い、ローコストでテンポラリーな解決法や創意工夫を形容する。デリーで知り合いを紹介してもらったときにも、都市部をはなれて村でもものを作る現場にいるときにも、事前に計画したとは思えない仕事のすすめかたを目にするたびに、この特徴的な言葉を思い出すのである。

1月、北西部に位置するラージャスターン州ジャイプール市から車で1時間ほどの距離にあるプリント生産集積地を訪れた。サンガネール村は、昔から木製のハンド・ブロッ

クを使ったプリントで有名で(写真1)、そのほかに鉄製枠に多様な模様を入れたスクリーン生地を使って行なうプリント(写真2)もみられる場所である。なるほど、一画すべてがプリント工場で、普通の住宅の2階部分に5メートルほどの作業台を2つおいているところから、約25メートルの作業台を5列備えた工場まである。さらには、2人1組になって行なうハンド・スクリーンプリントを、古い枠はそのまま利用して、色を伸ばし乾燥するところにだけ動力を備え付けた半自動プリント機械をおく工場もある。昔ながらの方法も使いながら、出来るところから次々と何かを付け足して生産がなされている一帯は、ビレッジと聞いて、日本からきた素人学生が勝手に思い描いていた、ラージャスターン州の荒涼とした、広い地平線のなかにある村とはちがうものだった。幹線道路が近いこともあって、できた製品は軽トラックやバイク、ラクダ、牛、馬の荷車に載ってジャ



写真1 ハンド・ブロックプリントの様子



写真2 ハンド・スクリーンプリントの様子

イプール市内まで運ばれ、さらには大型トラックなどですぐにデリーや他の都市へ運送されるのである。

初めてデリーの工業地域を訪れたとき、え、こんなところで作っているのかと思ったものなのだが、今回も、え、こんなところから布がプリントされて来ているのかと驚くばかりである。前者の「こんな」は、都会とは思えなかったという意味で、後者の「こんな」は、驚くほど都市に近いものだったという意味である。今では、さまざまな場所でアパレル生産をみて、こちらの人のビジネスのすすめ方、交渉の様子やテンションも理解してきて、前者の工場が輸出製品を作る十分な場所であるとわかるが、当初は、継ぎ足しながら造ったのではないかというほど、ややこしい建物の造りや、あまりにもいろいろな従業員の服装、自分をみる人々の目、機械の音や繊維の埃、同じヒンディー語と全く思えない聞き取れない言葉、小さくて目立たない看板、照明の度合い、つくっているもののバラエティーなどさまざまな要素が一緒になって押し寄せ、日本から持ち込んだ自分のイメー

ジとは程遠いなかで、「こんな」ところで作っているのかと驚いたのである。今回は、すこしはデリーで修行を積んだ身であるし、村落部は都市とかなり違うと思っていたのだが、思った以上にデリー市内での生産現場とラージャスターンの村での生産現場での仕事のすすめ方が似ていて、やはり新鮮な驚きがあった。

この驚きは、私が固定化された地域のイメージをもっていたためでもあるだろうが、単にそれだけではない。どの場所も、政策の変化の下、工業団地が近隣に出現したりしなかったり、人々の行き来、ものの運搬、情報の伝播などさまざまな要素が組み合わさって、変化しながら存在している。そしてその変化が、どうやら私が考えている(た)よりも、はるかに *jugaad* (テンポラリー) なのである。それは、村落部でのスクリーンプリントの例でいえば、今ある古い枠を利用してまずは動力を補う試みであるし、都市部のアパレル企業が、手持ちの情報網をたどって染色を専門に行なう村に仕事をだし、その後デリーで少しアレンジを加える試みであるかもしれない。また、都市でも村でも運送に何でもトラックを使うのではなく、場所によって異なる道路状況やコストを考え昼間は動物の力をかりて近くの場合まで運んでおき、その後乗り物を組み合わせたりすることでもあるかもしれない。

それは、一方では長期的視点に欠けた場当たりのなものだと映るかもしれない。しかしながら、とにかく今ある手持ちの情報や人やものからやってみるという、目に見えないし

説明しがたい意識や考えは、デリーにいても ともに、私の思い込みを取っ払ってくれるの
都市部からはなれても、いつも新鮮な驚きと である。